

氏 名	飯塚 麻紀		
学 位 の 種 類	博士（看護科学）		
学 位 記 番 号	博甲第 8218 号		
学位授与年月	平成 29 年 3 月 24 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	脳神経疾患患者の家族が患者の病気に関して抱く不確かさの関連要因		
主 査	筑波大学教授	博士（心身障害学）	森 千鶴
副 査	筑波大学准教授	博士（看護学）	古谷 佳由理
副 査	筑波大学准教授	博士（保健学）	浅野 美礼
副 査	筑波大学助教	博士（ヒューマン・ケア科学）	岡本 紀子

## 論文の内容の要旨

飯塚麻紀氏の論文は、脳神経疾患患者の家族が患者の病気に関して抱く不確かさに関連する要因を明らかにしたものである。その要旨は以下の通りである。

### （目的）

著者は脳神経疾患により突然、意識障害などの障害を持った患者に戸惑いを感じ、患者の状況に一喜一憂しているが、看護の必要性を感じながらも、これまでに十分に実践できていなかった現状を研究の動機として、国内外の論文を活用して述べている。

脳神経疾患の患者の家族は、患者の病気を病気として認識しつつも、病気の進行や予後に不安を抱えながら揺れ動くため、1998 年に Mishel が提唱した「不確かさ」の理論を活用することが可能ではないか考えるに至った経緯と述べている。また、家族が不確かになる要因を探ることで、今後家族への看護の視点が明確になると研究の意義について説明している。

著者の研究は、以下の 2 つの研究で構成されている。

第 1 研究では、Mishel が定義した不確かさ理論に基づき作成した「家族が患者の病気に対して抱く不確かさ測定尺度」を我が国で使用するために、日本語版を作成し信頼性と妥当性を明らかにしている。

第 2 研究では、第 1 研究で明らかにした尺度を使用し、不確かさ認知モデルである刺激要因と構造提供要因という関連要因を明らかにすることを目的として実施されている。

### ＜第 1 研究＞

#### （方法）

関東、東北地方の 5 つの総合病院に入院している脳神経疾患と診断され入院している患者の家族 204 名を対象者としている。信頼性の検討には①項目分析、②尺度の正規性の確認、③尺度の内的整合性の確認を行っている。また妥当性検討には①状態不安との併存妥当性、②探索的因子分析による構成概念妥当性の検討、③感度の確認として患者の意識レベル、生活動作など患者の背景による違いを検討して

いる。

(結果)

150 名から回答を得、有効な 133 名のデータ分析した結果、「病気に関する不確かさ尺度—家族用」日本語版の信頼性、妥当性を検証した。信頼性として I-T 項目相関は 0.2 以上の正の相関、尺度の正規性を確認、Cronbach  $\alpha$  係数は 0.91 であり、いずれも信頼性が高いことが明らかになった。また併存妥当性をみた状態不安との相関は 0.66 であり、探索的因子分析においても、スクリー基準により原版と同様の 1 因子構造であることにより妥当であることが確認された。さらに感度の確認として実施した対象者の背景から脳卒中患者の家族と他の脳神経疾患患者の家族に違いがある ( $p < .05$ ) こと、急性期を脱した時期に不確かさが高い ( $p < .001$ ) ことが明らかになった。また、脳神経疾患患者の家族は、先行研究で言われている他の疾患患者の家族よりも不確かさが高いことが明らかになった。

そこで、第 2 研究では急性期を脱した脳卒中患者の家族を対象として調査を実施している。

<第 2 研究>

(方法)

東北地方、東海地方の 5 つの総合病院に入院し、急性期を脱している脳卒中患者の家族 146 名を対象者としている。関連要因の構造提供要因として医療者への信頼、ソーシャルサポート、教育を、刺激要因として症状のパターン、出来事の熟知度を挙げ、一元配置分散分析、重回帰分析を用いて分析している。

(結果)

76 名から回答を得、有効な 62 名の対象者の調査用紙を分析した結果、脳卒中患者の家族が抱く不確かさと、医療職者の情報提供 ( $r = -.40$ ) や患者の尊重の仕方 ( $r = -.28$ ) に弱い相関から中程度の相関及び、ソーシャルサポートと弱い相関 ( $r = -.28$ ) があることが認められている。また患者の意識レベル、生活動作は悪いほど、さらに患者から頼られる存在ではないと感じている者ほど不確かさが高くなること ( $R^2 = .419$ ) を明らかにしている。

(考察)

脳神経疾患患者の家族の抱く不確かさは、患者の病期に強く影響を受けて変化し、また不確かさとともに不安を抱いている様子がうかがえた。また、他の疾患よりも脳卒中患者の家族に不確かさが強いことが明らかになり、家族にとって患者の意識レベルと生活動作は患者の症状が固定するまでは、見通しが立たないことで不確かさが高くなると考えられ、この状況は海外の傾向と同様であると述べている。また、患者から最も頼られる存在であると認識している家族は、医療従事者からの情報提供があるためか、不確かさが低くなっていると考えられると述べている。

これらのことから、脳神経疾患患者の家族が患者の病気に関して抱く不確かさを低減するためには、看護師は患者に丁寧なケアを提供すること、看護師が患者家族に積極的に関わること、患者の状態をきちんと説明することなどが重要であるという示唆を得、今後の看護のあり方について述べている。

## 審査の結果の要旨

(批評)

本研究は、これまで看護が十分に行われていなかった急性期を脱した脳神経疾患患者の家族について検討した研究であり、大変意義深いと思われる。特に急性期を脱した脳卒中患者の家族が高い不確かさを抱いていること、それが患者の意識状態や医療職者からの情報提供の状況、家族のサポート状況によって変化するものであることを明らかにした点、また家族の不確かさを測定する尺度を作成したことにより、今後の看護援助において有用だと考える。

平成 29 年 1 月 25 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士(看護科学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。